学年進行に伴う口頭作業の取扱い

加藤　剛・倉田有邦・高橋みな子・盛田義彦

Ⅰ．研究目的

中学校での英語の授業を進めて行く際に，聞く・話す・読む・書く，のいわゆる四技能を均等に伸ばして行くことが必要であるとされており，特に聞き取る力と話す力は，読んだり書いたりする力の前提として考えられるばかりでなく，最近ではいわゆる「役に立つ」英語の一環として，それ自体重要な技能として考えられている。このように重要視されているにもかかわらず，Hearing 及び Speaking は今なお英語学習上の困難点であり，一般生徒の Weak Point である。本校においてもこのような傾向を是正すべく，つとめて口頭作業の量を多くし，Thinking in English の習慣をつけるように努力しているものの Oral Work に伴う困難さ，不自由さは学年が進むにつれて大きくなるばかりであることは否定出来ない。そこで今回は Oral Work に対する生徒自身の感じ方，考え方といったものを，他の作業との比較においてとらえ，次に Oral Work を困難ならしめる諸条件を考察し，今後の指導上の留意点を探り出そうとしてみたわけである。

Ⅱ．アンケートとその結果

アンケート　Ⅰ

他の教科とくらべて「英語」は好きですか。

	中1 男	中1 女	中1 小計	中2 男	中2 女	中2 小計	中3 男	中3 女	中3 小計	計
好　き	21	21	42	17	20	37	10	18	28	107
どちらともいえない	26	13	39	25	18	43	24	18	42	124
きらい	4	4	8	7	3	10	15	4	19	37

アンケート　Ⅱ

A．英文を聞いて，その意味をつかむこと。
B．英文を読んで，その意味をつかむこと。
C．日本語を英語になおして言うこと。
D．日本語を英語になおして書くこと。

以上四つについて
(イ)　やさしいと思う順序
(ロ)　好きなものからの順序

	順序	中1 89名 イ(易)	中1 ロ(好)	中2 93名 イ(易)	中2 ロ(好)	中3 88名 イ(易)	中3 ロ(好)
A (聞)	1	11	14	10	19	9	15
	2	46	25	45	27	31	25
	3	21	31	23	29	27	25
	4	11	19	15	18	21	23
B (読)	1	64	40	66	39	61	42
	2	14	28	15	34	14	22
	3	10	14	8	12	9	13
	4	1	7	4	8	4	11
C (話)	1	10	16	5	13	5	10
	2	14	19	18	17	16	21
	3	43	26	26	24	24	28
	4	22	28	44	39	43	29
D (書)	1	5	19	12	23	13	20
	2	14	17	15	15	27	20
	3	15	18	36	27	28	25
	4	55	35	30	28	20	23

アンケート　Ⅲ

英語の授業で，下のわくのことがらについて，次の質問に答えなさい。答は記号で書きなさい。

a．単語の発音
b．単語の意味
c．先生が教科書を読むのを聞く。
d．先生のあとについて読む。
e．生徒にあてて読ませる。
f．先生が文法的な説明をする。
g．先生が教科書を日本語に訳す。
h．生徒にあてて訳させる。
i．文をいろいろ言いかえたり，書きかえたりする。
j．日本文を英語になおして口で言う。

k．日本文を英語になおして，黒板やノートに書く。
l．英語で問答する。
m．教科書のテープを聞く。
n．教科書の一部を暗しょうする。
o．日常英会話
p．英語の歌を聞いたり，歌ったりする。
q．教科書の他に，英語の物語などを読む。

質問1.　好きなものを三つあげなさい。
質問2.　きらいなものを三つあげなさい。
質問3.　好き，きらいと関係なく，大切だと思うものを三つあげなさい。

	質問1							質問2							質問3						
	中2 男	中2 女	小計	中3 男	中3 女	小計	計	中2 男	中2 女	小計	中3 男	中3 女	小計	計	中2 男	中2 女	小計	中3 男	中3 女	小計	計
a	6	7	13	3	3	6	19	12	9	21	9	2	11	32	35	34	69	7	14	21	90
b	8	6	14	6	2	8	22	3	3	6	4	4	8	14	14	7	21	6	3	9	30
c	11	5	16	11	6	17	33	5	5	10	2	3	5	15	3	2	5	1	2	3	8
d	3	5	8	4	5	9	17	3	3	6	9	6	15	21	2	0	2	1	1	2	4
e	9	11	20	3	6	9	29	7	5	12	11	7	18	30	3	5	8	1	1	2	10
f	11	2	13	5	3	8	21	3	10	13	7	11	18	31	26	25	51	30	25	55	106
g	6	2	8	8	3	11	19	4	6	10	2	8	10	20	4	1	5	1	1	2	7
h	2	5	7	8	1	9	16	16	5	21	11	9	20	41	3	2	5	3	1	4	9
i	13	10	23	7	3	10	33	6	6	12	9	8	17	29	18	13	31	19	14	33	64
j	9	4	13	9	7	16	29	18	23	41	18	15	33	74	11	9	20	18	9	27	47
k	14	15	29	14	4	18	47	11	11	22	10	11	21	43	16	10	26	13	11	24	50
l	11	7	18	11	13	24	42	15	11	26	16	6	22	48	6	8	14	12	14	26	40
m	14	7	21	18	9	27	48	7	4	11	6	5	11	22	2	1	3	7	4	11	14
n	3	0	3	3	4	7	10	26	20	46	21	13	34	80	6	6	12	5	5	10	22
o	10	14	24	11	14	25	49	0	1	1	5	3	8	9	3	7	10	15	10	25	35
p	10	16	26	14	19	33	59	11	0	11	3	2	5	16	0	0	0	0	0	0	0
q	12	12	24	11	18	29	53	5	3	8	3	2	5	13	1	1	2	7	5	12	14

Ⅲ．アンケートの結果についての考察

アンケートⅠの結果からは要するに英語という教科は学年が進むにつれて好む生徒が減り，嫌う生徒が増えるという事実が見てとれるわけである。そして次のアンケートⅡにおいては，英語科内での四つの学習作業の相対的な困難度及び興味・関心度を見たものであるが，それによると，Bの Reading は3ケ年を通して最も容易な作業であるのに対し，Dの Writing は相対的困難度が減る一方，Aの Hearing，Cの Speaking のそれは学年毎に増えていることがわかる。Dの Writing の絶対的な意味での困難度及び好き嫌いの程度は，アンケートⅠの結果をあわせ考えれば，それほど楽になって好かれて来ているとは考えられない故，これは Hearing 及び Speaking が学年を追って困難となり，従って嫌われる作業となっているという事実を表わしていると見ていいと思う。また困難度と好き嫌いの度合いとは密接な関係をもっていて，易しければ何となく好きだと感じ，むつかしければ嫌いという極めて単純にして明瞭な感じ方をする生徒が大半を占めていることが想像される。アンケートⅢは，英語の授業の諸作業を少々わくを広げて考え過ぎたきらいがあるため，焦点がいささかぼけてしまっているが，それでも一応次のことは言えると思う。まずその一つは Oral Work の重要性は好き嫌いには関係なく，比較的よく認識されているということ。教師あるいは生徒による訳読（g，h）がほとんど重要視されていないのに比べ，言いかえ・書きかえ（i），口

頭作文(j)，英問英答(l)などを重要だとみなす生徒はかなり多い。先のアンケートⅡにあらわれているように，speaking は第2学年及び3学年については最も困難な作業であるが，少なくともそれを重要だと感じている生徒は2年生よりも3年生の方に多いのである(j, l, o)。第二にはアンケートⅡと同じ結果がここでもいえるのであって，学習作業に対する好き嫌いと，作業の困難度との比例関係が見られる。第三に，教師の文法説明を生徒は最も重要な作業とみなしていることが注目される。Oral Work とは全く相容れない考え方であるが，生徒の側から見れば無理もないことかも知れない。生徒の英語学習についての最大関心といえば，事のよしあしはともかく，まず入学試験のことである。入試には文法的な力をためすような問題が極めて多い。少なくとも Hearing や Speaking の練習よりは入試に直結していることはたしかである。それに入試といえば，第一に述べた Oral Work に対する重要性の理解も，本校の場合ある程度，入試に出されるという特殊事情によるためであると想像出来ないこともない。とすれば，Oral Work に関心をいだかせる方法も多元的に考えて，こういう外側からの動機づけといったものも必要ではないかと思われる。

Ⅳ. Oral Work を困難にする諸条件

以上のように Hearing と Speaking の作業が，学年を追って困難に感じられてくる傾向がはっきり見られるのは，どういう事情によるものであろうか。学年が進めばもちろん構文は複雑になり長文が現われてくる。Reading と Writing の作業も当然困難さは増す筈である。しかし Reading と Writing の場合には，一度でわからなければ何度でも読み返しあるいは作りなおしたりすることが出来るという，くり返しがきくわけで，またそのための時間的な余裕も十分に与えられるのが普通である。そはに対して Hearing と Speaking の場合はそうはいかない。これらの作業には常に即座に意味をとらえたり，あるいは発表したりする「即時性」とでもいったようなものが要求されている。1年生の教科書に出てくる程度の短文なら Writing よりも Speaking の方が容易であることは十分に想像される。それにまたこの時間においては Writing それ自体が相当困難を伴うことも容易に推察される。しかしそれが2年生に進んで，時制・構文その他の範囲が広がるにつれ，即時制を要求される Speaking は，比較的時間的余裕のある Writing よりも困難となってくる。即時性が構文の複雑化に追いついていけなくなるわけで，この現象は Recognition よりも，まず Production の段階に現われてくる。そして3年生にもなれば，Hearing が Writing よりも困難に感じられるに至って，学習上の困難度の分類が Recognition 対 Production という関係よりも，即時性の必要の有無による要素の方が大きくなってくる。

Oral Work を困難にする別の要素として，生徒の発達段階に伴う心理的な原因が考えられる。しかし扱う内容が幼稚だとか，現実離れしているとかいうことが直接に作用しているとは考えられない。そういった傾向に対する非難は教科全体に対する問題であって，特に Oral Work だけに当てはめるべきものではあるまい。問題はその実施方法にある。大まかにいって機械的な反覆作業は高学年になるほど，そしてまた同一学年においては，学力の進んだ者ほど倦怠感を起させ易い。知的な充実感とか成就感とかいったものは高学年になるほど多く求めるようになり，とかく単調になりがちな Oral Work をうとんずるようになってくる。入学試験にはさして影響はないと考える一般的風潮が更に拍車をかけることはもちろんである。

Ⅴ. 学年毎の Oral Work への配慮

このような条件の下で，われわれが試行錯誤的にとってきた配慮といったようなものを挙げて更に反省を加えてみたい。

第1学年においてはまず何よりも全員理解を目ざし，極力落伍者を出さぬように努めている。授業の大部分は Oral Work であり，Pattern Practice に Questions and Answers，そしてまた Recitation などを必ず行うようにしている。また Review にかなり大幅に時間をかけているのも他学年と異るところである。教材の内容もまとまった筋のある物語風のものなどはまずほとんど見当らない故，語法上の Drill が授業の大部分を占めることになり，Oral Work を行い易い条件がそろっている。更に英語を習い始めたばかりの生徒は，英語を話したり・聞いたりすることにかなりの興味・関心をもっている。Pattern Practice にせよ Questions and Answers にせよ，Individual を相手にしたり，Chorus で行ったり，あるいは生徒同志で行わせるなど，多彩な方法をとって行うことが，生徒の興味を極めて有効にかきたてる結果となり，活潑な雰囲気を比較的容易に作り出すことが出来る。

第2学年になると少し事情は違ってくる。行う Oral Work の種類は，第1学年の場合と変らないが問題はその方法である。例年かなり顕著に見られることだが，Chorus Work に対する反応が，この時期になるとかなり鈍ってくるようである。恐らく精神年令の発達による心理的変化が一番大きい原因であろう

が，教える側からすればこの点を何とか工夫しなければならない。Questions and Answers など Individual を相手にした作業がふえ，Chorus Work はやや後退する。本年は特別な試みとして Recitation をかなり重点的に課し，効果を観察せんとしたのであるが，生徒にかなり苦痛を与えたようであり，先のアンケートⅢにもその結果がうかがわれる。ただこの場合，ややもすると意味・内容を意識しない，いわゆる棒暗記になる危険もあるわけで，そのためには一定量を暗誦させた後で必ず Questions and Answers を行うなどの配慮は必要である。

第3学年になると Oral work はまず教材の分量がふえることで大きな制限をうけるのが現状である。そのため1，2学年の場合に比べ Review にあてる時間をかなり切りつめなければならない。新出文型・単語・文法事項などいずれも複雑になってくるため，Oral work はますますやりにくくなるわけである。関係詞や過去完了形など，既習の文法事村についての知識がなければどうにも取扱えない事項が多く，従って常に既習のものと Contrast させつつ Oral で大要をつかませた上で少しは理論的説明を加えるという方法をとっている。中3ともなれば，この理論的説明（もちろん日本語での）が彼らの知的好奇心をある程度満足させる効果をもつものであり，Oral Work のみですませるよりは，はるかに効果的である。またこの時期においては，Oral Work を教材の内容を問うための Questions and Answers の形で行うことは比較的容易であり，この際には既習の文型又は文法事項のみで十分間にあう。Chorus Work よりも Individual Work の方に重点が置かれるのは止むを得ない。

Ⅵ. 結　　び

各学年についてわれわれが指導する際に留意している事項は以上の如きものであるが，いずれの学年を通しても言えることは，一口に言えば生徒に成就感を与えるようにするということである。この成就感を感じさせる Oral Work というものの形，方法が学年差及び学力差によって変化しているのである。機械的作業から知的作業へ，全体作業から個別作業へと生徒の関心は向いて行く。何よりも大切なことはこういう発達段階の中でなおかつわれわれ教師が Oral Work の重要性を見失わないことであろうと思う。面倒でも3ケ年間続けることである。一度破られた習慣は教師側，生徒側のいずれにとっても取り戻すには容易でない。最後に Reading 及び Writing との関係について考えてみたい。先のアンケートによれば，これらの文字を仲介にした作業の方が，口頭による Speaking と Hearing より容易だと感じられているが，そのような Reading と Writing は先にも述べたように，かなりの時間をかけた上でのものであり，生徒はそれを当然のことのように考えているらしい。しかし本来の Reading なり Writing なりは，もちろん直読直解，即時作文を目指すものでなければならぬ筈である。そしてその場合には Hearing，Speaking の力がその土台になることは言うまでもない。これだけの学力を3年間で，しかも1週4～5時間の授業で，更には義務教育生徒の平均層に焦点を合わせて行い得るものかどうか些か疑問に思われないこともない。しかし少しでも理想に近ずけようとする努力は生徒に何らかの影響を与えぬ筈はないと思われるのである。